

旬を愛でる心を大切に、俳句を作っています

「俳句で日本を素敵にする」を掲げ、誰にとっても俳句が身近なものになるよう活躍している黛まどかさん。俳句を詠む楽しさを通して、忘れられがちな日本の持つ季節感や旬の大切さを語ります。

取材・文／編集部 写真／橋本哲 ヘアメイク／村山雅司(イマージュ) 着付／嶋本京子 書道／遠藤香葉(香葉書会)

俳句に季節は欠かせません。春夏秋冬、いつでも季節の流れを感じて季語を見出し作ります。

「触れさうなところで覚むる春の夢」

いかがでしょう。

この句を読んで、「まどかさん、おいしそうなおちそうを目の前にして、いざ食べようとしたらパッと消えて、ああ、夢だったのか……って、そういう夢をよく見るんですか？」っていう方がいて大笑いしました。

本当は片想いの切ない句なんですけど、解釈など、いろいろあっていいんです。とはいっても、やはり耐えたり忍んだりして、苦しいけれどそれを表に出さず、相手を偲ぶような愛を表現するのが俳句なんです。

たった17文字しかないけれど、日本人が大切にしてきた思いを忘れず入れたいですね。

日本の季節語って奥深いもので、例えば雨ひとつとっても、桜の時期なら「花の雨」、5月頃なら「若葉雨」、「青時雨」、山に卯の花が咲く頃に降る長めの雨は、花を腐らせるほど降るから「卯の花腐し」と、表現も多様。

**身近でも奥深い、
食べ物の季語で作る
楽しい俳句**

こういうことが俳句を通して味わえると、日本に生まれてよかったーって思えてきて、句を詠むこともやみつきになってくる。旬を愛でる気持ちを大切にしたいと心から感じられるんです。

「おぞうにのなつばきらきらひかりながら」

なんて、7歳のお嬢さんの句。

食べ物は、一番身近でわかりやすくいいですね。

食べ物の季語って面白くて、たくさん食材が季語になっていますが、これも奥が深く、意外にも、西瓜は秋の季語なんです。甘酒は夏の季語。語源を辿りながら、急に食べたくなってみたり、楽しいですよ。

**女性と緑茶は、よく似てる。
少し古くなっても若返るし、
ちよつと切なく、美しい**

「月刊ヘアパーン」では新季語もどんどんデビューさせてます。夏のピンツワースとか、秋のミルクティーとか……

私、お茶が大好きで俳句を作る時って、俳句とお茶は切り離せない。喫茶店なんかでお茶を飲みながらだとスラスラとまったりして。

以前には、煎茶の会と一緒に句会をしたこともあります。中国や韓国を旅する時などもお茶を求めて歩くということを楽しみのひとつにもしています。幻のお茶といわれている「春雪茶」を、韓国を歩き回ってついに味わうことが出来たことなどは、何よりも思い出深いです。もうすぐ、新茶の季節です。この頃になると思い出すのが、亡くなった祖母の話。

「緑茶は、古茶でも新茶の時期になると、また新茶の香りが出てくるのよ」と、よく言っていましたっけ。



まどか